

2次形式の速度分布函数に対する
LIOUVILLE 方程式の解

京大 理 清 水 理

§ 1 2次形式の速度分布函数に対する Liouville 方程式の解は, Eddington (1915), Jeans (1915) 以来 Schwarzschild (1936), Chandrasekhar (1940, 1941) をはじめに知られており, 恒星系力学の問題に適用されている。このことは, 恒星系内の恒星の速度は Maxwellian 型で近似できると考えられるので, 最初はその速度成分の自乗項のみという簡単なものから最後には最も一般的に速度の2次形式の速度分布まで調べられた。そして, 時間 t を含む非定常の場合は Chandrasekhar によって始めて取扱われた。しかし, これまでの結果は, いかなる恒星系がある簡単な対称性を保持するとの条件の下でえられたものである。

この研究の目的は, 恒星系が対称性を保持するとの条件をはずせばどうなるかを吟味することにある。渦状星雲などを含まないような恒星系についての情報が, これによってある程度えられるのではまいかとの予想からである。この論文

をその運動方程式の形から、以下にその直列の予想的結果を示す。

② 恒星系の重心を原点とする球面座標系をとった場合を考える。ある点 (r, θ, φ) における r, θ, φ 方向の線速度成分をそれぞれ U, Θ, Φ としたとき、恒星系 M におけるその点の速度分布は次の函数形で与えられるものと仮定する。

$$(1) \quad F = F(-E) \quad E \equiv h(U-U_0) + k(\Theta-\Theta_0) + l(\Phi-\Phi_0) + 2m(\Theta-\Theta_0)(\Phi-\Phi_0) + 2p(U-U_0)(\Theta-\Theta_0) + 2q(U-U_0)(\Phi-\Phi_0)$$

但し、 $h, k, l, m, p, q; U_0, \Theta_0, \Phi_0$ は座標 r, θ, φ および時間 t の函数である。

球面座標系に対する Liouville 方程式を言わす

$$(2) \quad \frac{\partial F}{\partial t} + U \frac{\partial F}{\partial r} + \Theta \frac{\partial F}{r \partial \theta} + \Phi \frac{\partial F}{r \sin \theta \partial \varphi} + \left(\frac{\Theta + \Theta_0}{r} + \frac{\partial \theta}{\partial t} \right) \frac{\partial F}{\partial \theta} + \left(-\frac{U \Theta}{r} + \frac{\partial \varphi}{\partial t} \right) \frac{\partial F}{\partial \varphi} + \left(-\frac{U \Phi}{r} - \frac{\Theta \Phi}{r} \cot \theta + \frac{\partial \varphi}{\partial t} \right) \frac{\partial F}{\partial \varphi} = 0$$

となる。但し、 $\partial \theta$ はポテンシャル函数である。

問題は、 F が (2) を満たすように h, k, \dots, φ を r, θ, φ, t で表わす、ということになる。

まず、(1) を (2) に代入すると、 U, Θ, Φ に関する最高次が3次の20項からなる多項式がえられる。そこで、その各々の係数を零とおけば、 h, k, \dots, φ についての20組の1次偏微分方程式が導かれ、これらから h, k, \dots, φ あるいは $\partial \theta$ が求まるはずである。しかし、実際にやるとなるとかなり面倒である。

§ 3 前節の結果を代入すると次のようになる。

$$\begin{aligned}
 l_1 &= H - h_{2\varphi}(1 - \cos 2\theta) + h_{1\varphi} \sin 2\theta \\
 l_2 &= \{H - h_{2\varphi}(1 + \cos 2\theta) - h_{1\varphi} \sin 2\theta\} + r(b_{2\varphi} \cos \theta - 2b_{1\varphi} \sin \theta) + r^2(K + l_{22\varphi}) \\
 l &= (H - 4h_{20} + 2h_{2\varphi}) + r\{(2b_{20} - b_{2\varphi}) \cos \theta - 2(b_{1\varphi} + c_{\varphi}') \sin \theta\} \\
 &\quad + r^2\{(K + l_{220}) - \frac{1}{2} h_{2\varphi}(1 + \cos 2\theta) + l_{1\varphi} \sin 2\theta\} \\
 2M &= (-2h_{1\varphi}' \cos \theta - 2h_{1\varphi}' \sin \theta) + r\{(c_{20} + \frac{1}{2} b_{2\varphi}') + (c_{20} + \frac{1}{2} b_{2\varphi}') \cos 2\theta - c_{20} \sin 2\theta\} \\
 &\quad + r^2(l_{22\varphi}' \cos \theta + 2l_{22\varphi}' \sin \theta) \\
 2\varphi &= (2h_{1\varphi} \cos 2\theta - 2h_{2\varphi} \sin 2\theta) + r(2b_{1\varphi} \cos \theta + b_{2\varphi} \sin \theta) \\
 2g &= (2h_{1\varphi}' \cos \theta - 2h_{2\varphi}' \sin \theta) + r\{(-c_{\varphi}' + 2b_{1\varphi}') + c_{\varphi}' \cos 2\theta + (c_{20} + \frac{1}{2} b_{2\varphi}') \sin 2\theta\}
 \end{aligned}$$

但し、 $\frac{\partial a}{\partial \varphi} = a'$, $\neq E$

$$\begin{cases}
 h_{2\varphi} \equiv h_{20}(t) + h_{21}(t) \cos 2\varphi + h_{22}(t) \sin 2\varphi, & h_{1\varphi} \equiv h_{11}(t) \cos \varphi + h_{12}(t) \sin \varphi \\
 b_{2\varphi} \equiv b_{20}(t) + b_{21}(t) \cos 2\varphi + b_{22}(t) \sin 2\varphi, & b_{1\varphi} \equiv b_{11}(t) \cos \varphi + b_{12}(t) \sin \varphi \\
 H \equiv H(t), & K \equiv K(t), & c_{20} \equiv c_{20}(t) & c_{\varphi} \equiv c_{11}(t) \cos \varphi + c_{12}(t) \sin \varphi \\
 l_{22\varphi} \equiv l_{220}(t) + l_{221}(t) \cos 2\varphi + l_{222}(t) \sin 2\varphi, & l_{2\varphi} \equiv l_{21}(t) \cos \varphi + l_{22}(t) \sin \varphi
 \end{cases}$$

$\mathcal{D}_0, \mathcal{Q}_0, \mathcal{E}_0$ は個別に θ の関数でない

$$(4) \quad \Delta_1 \equiv h\mathcal{D}_0 + p\mathcal{Q}_0 + q\mathcal{E}_0, \quad \Delta_2 \equiv r\mathcal{D}_0 + l_2\mathcal{Q}_0 + m\mathcal{E}_0, \quad \Delta_3 \equiv g\mathcal{D}_0 + m\mathcal{Q}_0 + l\mathcal{E}_0$$

とすると、これら3つは次のようになる。

$$(5) \quad \begin{cases}
 2\Delta_1 = (a_0 \cos \theta + a_{\varphi} \sin \theta) + r\{H - h_{2\varphi}(1 - \cos 2\theta) + h_{1\varphi} \sin 2\theta\} \\
 2\Delta_2 = (-a_0 \sin \theta + a_{\varphi} \cos \theta) + r\{d_{\varphi}' - h_{2\varphi}' \sin 2\theta + h_{1\varphi}' \cos 2\theta\} + r^2(b_{2\varphi}' \sin \theta + 2b_{1\varphi}' \cos \theta) \\
 2\Delta_3 = a_{\varphi}' + r\{(h_{1\varphi}' - d_{\varphi}') \cos \theta + (h_{2\varphi}' - h_{2\varphi}') \sin \theta\} + r^2\{2b_{1\varphi}' - c_{\varphi}'(1 - \cos 2\theta) + (c_{20} + \frac{1}{2} b_{2\varphi}') \sin 2\theta\}
 \end{cases}$$

但し、 $\frac{\partial a}{\partial \theta} = a'$, $\neq E$

$$a_\varphi \equiv a_{11}(t)\cos\varphi + a_{12}(t)\sin\varphi, \quad a_0 \equiv a_0(t); \quad d_\varphi \equiv d_{11}(t)\cos\varphi + d_{12}(t)\sin\varphi, \quad \nu = 2(\omega)$$

物理的には、 $r=0$ で $\bar{U}_0 = \bar{\Theta}_0 = \bar{\Phi}_0 = 0$ と考えるべしであるから
 (4) において a_0, a_φ は零とみなす。ポテンシャル函数 δ_0 につい

ては、 $\bar{U}_0 \Delta_1 + \bar{\Theta}_0 \Delta_2 + \bar{\Phi}_0 \Delta_3 = X$ とおくと、

$$(6) \quad \begin{cases} 4 \frac{\partial \delta_0}{\partial r} + \nu \frac{\partial \delta_0}{r \partial \theta} + \varphi \frac{\partial \delta_0}{r^2 \sin \theta \partial \varphi} = \frac{\partial \Delta_1}{\partial t} - \frac{1}{2} \frac{\partial X}{\partial r} \\ \nu \frac{\partial \delta_0}{\partial r} + 4r \frac{\partial \delta_0}{r \partial \theta} + m \frac{\partial \delta_0}{r^2 \sin \theta \partial \varphi} = \frac{\partial \Delta_2}{\partial t} - \frac{1}{2} \frac{\partial X}{r \partial \theta} \\ \varphi \frac{\partial \delta_0}{\partial r} + m \frac{\partial \delta_0}{r \partial \theta} + l \frac{\partial \delta_0}{r \sin \theta \partial \varphi} = \frac{\partial \Delta_3}{\partial t} - \frac{1}{2} \frac{\partial X}{r \sin \theta \partial \varphi} \\ \Delta_1 \frac{\partial \delta_0}{\partial r} + \Delta_2 \frac{\partial \delta_0}{r \partial \theta} + \Delta_3 \frac{\partial \delta_0}{r \sin \theta \partial \varphi} = -\frac{1}{2} \frac{\partial X}{\partial t} \end{cases}$$

から求められる。 δ_0 がわかると、Poissonの方程式から恒星系
 Mの密度 $\rho(r, \theta, \varphi; t)$ が導かれる。すなわち、

$$(7) \quad -4\pi G \rho = \frac{\partial^2 \delta_0}{\partial r^2} + \frac{2}{r} \frac{\partial \delta_0}{\partial r} + \frac{\partial^2 \delta_0}{r^2 \partial \theta^2} + \frac{\cot \theta}{r} \frac{\partial \delta_0}{r \partial \theta} + \frac{\partial^2 \delta_0}{r^2 \sin^2 \theta \partial \varphi^2} \quad (G: \text{万有引力定数})$$

§ 4 (1) 式の F が R のどんな函数形であるかが不明であつては、恒星系のポテンシャル函数 δ_0 、したがって恒星系の密度分布 $\rho(r, \theta, \varphi; t)$ が求まるのは、各点における速度成分の平均値にあたる $\bar{U}_0, \bar{\Theta}_0, \bar{\Phi}_0$ が悉く零とみなさない場合であることは、(4) 式と X の表現式を参照して (6) を見れば明らかである。この場合には、恒星系のポテンシャル・エネルギーは求まるが、運動エネルギーの方は F の函数形をたえずいともわからぬ。

F の函数形として、一般に e^{-2} が採用されているが、

が当たって見た2,3の例については、このようにすると恒星系の全質量は無限大になってしまう。これは、無限大の速度をもつ恒星の衝突が絶えないことに対応するとも考えられる。球状対称の恒星系については、逃脫速度以上の速度を truncate した場合にもこのことが起りうるから、有限質量の恒星系については、いわゆる Maxwellian 型の速度分布が適当であろうである。そこで考えられるのは、 F を \mathbb{R}^3 の多項式として近似することである。勿論、この場合逃脫速度以上の速度を truncate しなければならぬ。原理的には、既知の ρ から

$$(8) \quad \rho = \int_{|\mathbf{v}|=0}^{|\mathbf{v}|=\sqrt{2\phi}} F(\mathbf{v}) d\mathbf{v}, \quad \nabla(\phi, \Theta, \Xi)$$

を解けば $F(\mathbf{v})$ が求まるわけであるが、実際にこの積分方程式から $F(\mathbf{v})$ の具体的な形を定めることは殆んど不可能である。

しかし、 $\gamma \rightarrow 0$ のとき $\phi \rightarrow \phi_0 + \phi_2 \gamma^2 + \phi_3 \gamma^3 + \dots$ 、また $\gamma \rightarrow \infty$ のとき $\phi \rightarrow \frac{\phi_1}{\gamma} - \frac{\phi_2}{\gamma^2} + \dots$ となるはずであるから、(7) から

$$(9) \quad \begin{cases} \gamma \rightarrow 0 \text{ のとき} & \rho \rightarrow 6\phi_2 + 12\phi_3 \gamma + \dots \\ \gamma \simeq R \text{ のとき} & \rho \rightarrow -6\phi_2/\gamma + \dots \end{cases} \quad (R: \text{恒星系の半径})$$

となる。これを考慮に入れて $F = \sum_{i=1}^{k_2} \alpha_i P^i$ における k_1, k_2 および α_i を trial and error で近似することが可能である。

§5 さて、以上の結果が観測されている恒星系に適用できるかどうかを見るには、いろいろな場合について近似的な

具体的に表現式を求めなければならぬ。その手始めとして、
 二ではまず円板に近い恒星系について考察する。

今までに挙げた諸式において、 $\theta=90^\circ$ とおき 2次元に reduce
 した後、(3)および(4)の記号を次のように書き改める。

$$(10) \begin{cases} (H-2h_{20}) \longrightarrow H(t), & (b_\varphi + C_\varphi) \longrightarrow b_\varphi \equiv b_1(t)\cos\varphi + b_2(t)\sin\varphi, \\ (K+h_{20}) \longrightarrow K: \text{const.}, & (h_{2\varphi} - h_{20}) \longrightarrow h_{2\varphi} \equiv h_1(t)\cos 2\varphi + h_2(t)\sin 2\varphi \\ \text{ただし, } \frac{\partial a}{\partial \varphi} \equiv a', & \frac{\partial a}{\partial t} \equiv \dot{a}; \quad 0 \leq \frac{K\gamma^2}{H+K\gamma^2} \equiv \gamma \leq 1. \end{cases}$$

そうすれば、(3)および(5)は

$$(3) \begin{cases} h = H(1 - \frac{2h_{20}}{H}), \\ l = H(\frac{1}{1-\gamma} + 2\frac{h_{2\varphi} - \gamma b_\varphi}{H}), \\ q = H(\frac{-h_{2\varphi} + \gamma b_\varphi}{H}). \end{cases}$$

$$(5) \begin{cases} \Delta_1 = \frac{\gamma}{2}(\frac{H}{L} - 2\frac{h_{2\varphi}}{L}) \\ \Delta_2 = \frac{\gamma}{2}(1 + \frac{-h_{2\varphi} + \gamma b_\varphi}{L}) \end{cases}$$

の如く簡潔になる。

よって、(4)から σ_0 と Φ_0 、(6)の σ_1 と σ_3 式から $\frac{\partial \sigma_0}{\partial \gamma}$ と $\frac{\partial \sigma_3}{\partial \varphi}$ が
 求まる。reduce された(6)の σ_4 式は、二うして導かれたポテ
 ンシャル函数への付加条件とはならず、identically に成立す
 ることが証明できる。かくて、reduce された(7)式から密度 ρ が
 えられる。ただし、(7)式を形式的に reduce すれば、 $\frac{\partial \sigma_0}{\partial \gamma}$ の係数
 は 2 となるが、 $\frac{1}{L} \frac{\partial h_{20}}{\partial \gamma}$ の reduction からの影響で、1 になるの
 で円柱座標系の $\Delta \sigma_0$ からの reduction と一致する。

§ 6 前節の如き簡易な場合でも一般性を失わずに、
 それ故、まず $\dot{\theta}_{2\varphi}, \dot{\gamma} b_{\varphi}$ に関する線型近似の場合について考察
 してみる。途中の面倒な演算は省略して、平均速度の成分に
 対応する \bar{U}_0 とおき、おき $\dot{\gamma}$ の成分 $-\frac{\partial \bar{U}_0}{\partial \dot{\gamma}}$ と $-\frac{\partial \bar{U}_0}{\partial \dot{\gamma} b_{\varphi}}$ を示すと、

$$(1) \begin{cases} \bar{U}_0 = \frac{\dot{\gamma}}{2H} \left\{ \frac{\dot{H}}{\Sigma} - 2 \frac{\dot{H}^2}{\Sigma} + (1-\gamma) \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} + \frac{2\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\theta}_{2\varphi}}{H} \right\}, \\ \bar{U}_0 = \frac{(1-\gamma)\dot{\gamma}}{2H} \left\{ 1 - \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - 2\dot{\gamma} b_{\varphi}}{\Sigma} - 2(1-\gamma) \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} + \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} \right\}. \end{cases}$$

$$(2) \begin{cases} \frac{\partial \bar{U}_0}{\partial \dot{\gamma}} = \frac{\dot{\gamma}}{2H} \left\{ \frac{\dot{H}}{\Sigma} - 2 \frac{\dot{H}^2}{\Sigma} + \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\theta}_{2\varphi}}{H} + (1-\gamma) \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} \right\} - \frac{\dot{\gamma}^2}{4H^2} (1-\gamma)^2 \left\{ 1 + \frac{1}{(1-\gamma)^2} \frac{\dot{H}^2}{\Sigma^2} - \frac{4}{(1-\gamma)^2} \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\theta}_{2\varphi}}{H} \right. \\ \left. - \frac{2\dot{\theta}_{2\varphi}}{\Sigma} + 2(3 + \frac{\gamma}{1-\gamma}) \frac{\dot{\gamma} b_{\varphi}}{\Sigma} + 4(\gamma + \frac{1}{(1-\gamma)^2} \frac{\dot{H}^2}{\Sigma^2}) \frac{\dot{\theta}_{2\varphi}}{H} + 2 \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\theta}_{2\varphi}}{H} + (3-4\gamma) \frac{\dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} - (3 + \frac{\gamma}{1-\gamma}) \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} \right\}, \\ \frac{\partial \bar{U}_0}{\partial \dot{\gamma} b_{\varphi}} = \frac{(1-\gamma)\dot{\gamma}}{2H} \left\{ 1 - \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - 2\dot{\gamma} b_{\varphi}}{\Sigma} - 2(1-\gamma) \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} + \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} \right\} - \frac{\dot{\gamma}^2}{4H^2} (1-\gamma)^2 \left\{ \frac{4\dot{\theta}_{2\varphi} - 2\dot{\gamma} b_{\varphi}}{\Sigma} - \frac{2}{1-\gamma} \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{\dot{\theta}_{2\varphi}}{H} \right. \\ \left. - \frac{\dot{H}}{\Sigma} \frac{4\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} + \frac{1}{(1-\gamma)^2} \left(\frac{\dot{H}}{\Sigma} \right)^2 \frac{2\dot{\theta}_{2\varphi} - \dot{\gamma} b_{\varphi}}{H} \right\} \end{cases}$$

上の (2) 式から $\frac{\partial \bar{U}_0}{\partial \dot{\gamma} b_{\varphi}}$ の identity が成立つ条件を求めると、 $\cos \varphi$
 および $\sin \varphi$ の係数から、

$$(3) \begin{cases} \dot{b}_1 - \frac{\dot{H}}{2H} b_1 + \frac{1}{2H} b_2 = 0, & \left\{ \begin{aligned} \ddot{b}_2 - \frac{\ddot{H}}{2H} b_2 + \frac{\dot{H}^2}{4H^2} b_2 - \frac{1}{2H} \dot{b}_1 + \frac{1}{4H^2} \dot{b}_1 b_1 = 0, \\ \ddot{b}_1 - \frac{\ddot{H}}{2H} b_1 + \frac{\dot{H}^2}{4H^2} b_1 + \frac{1}{2H} \dot{b}_2 - \frac{1}{4H^2} \dot{b}_2 b_2 = 0. \end{aligned} \right. \end{cases}$$

また、 $\cos 2\varphi$ および $\sin 2\varphi$ の係数からは

$$(4) \begin{cases} \dot{h}_1 - \frac{\dot{H}}{H} h_1 + \frac{1}{2H} h_2 = 0, & \left\{ \begin{aligned} \ddot{h}_2 - \frac{\ddot{H}}{H} h_2 - \frac{\dot{H}}{H} \dot{h}_2 + \frac{\dot{H}^2}{H^2} h_2 = 0, \\ \ddot{h}_1 - \frac{\ddot{H}}{H} h_1 - \frac{\dot{H}}{H} \dot{h}_1 + \frac{\dot{H}^2}{H^2} h_1 = 0. \end{aligned} \right. \end{cases}$$

さらに三前函数を含む項から、 $\dot{L} = 0$ or $L = \text{const.}$ が得る。

(3) の右側は左の左側から誘導できるから、左側だけを考え
 小字で示す。 $b_1 = b(t) \sin \delta_1(t)$, $b_2 = b(t) \cos \delta_1(t)$ とおき (3) に代入すると、

$$(5) \quad b = b_0 \sqrt{\frac{H(t)}{H_0}}, \quad \dot{\delta}_1 = -\frac{1}{2H(t)}, \quad b_0, H_0, L = \text{const.}$$

とえる。

また、(14)の右側に、 $h_1 = h(t) \sin \alpha_2(t)$, $h_2 = h(t) \cos \alpha_2(t)$ を代入すれば同様に

$$(16) \quad h_1 = h_0 \frac{H(t)}{H_0}, \quad \dot{\alpha}_2 = -\frac{L}{2H(t)}, \quad h_0: \text{const.}$$

とえるが、これらを(14)の右側に代入すると、 $\frac{L^2}{4H^2} h = 0$ すなわち、 $L=0$ または $h=0$ となる。よって、線型近似では $L=0$ 、すなわち(11)の運動速度が擾動項しか含まぬならば、 $h = h_0 \frac{H(t)}{H_0}$, $\alpha_2: \text{const.}$ であるが、 $L: \text{const.} \neq 0$ の場合には h_{2q} の擾動は消えるはずである。しかし、豫備的な2次型近似の計算結果では、(13)が不変であるのは勿論として、(14)の各式の右辺は予想のようになぜか b_q と b_p の積を含む項となる。ここでは簡単のため $L: \text{const.} \neq 0$ の場合にも(16)が成立つことを仮定しよう。(近似を高めていっても以下の結果の大筋は変わらないから)

よって、(12)から $\frac{\partial^2 b_1}{\partial \gamma^2}$, $\frac{\partial^2 b_2}{\partial \varphi^2}$ を導き、(15), (16)を考慮して Poisson の式を作れば、 b_1, b_2 または h_1, h_2 の係数はそれぞれ相等しくなり、

$$(17) \quad 4\pi G \rho = -\frac{\ddot{H}}{H} + \frac{\dot{H}^2}{2H^2} + \frac{L^2}{2H^2} (1-\gamma)^2 (1-2\gamma) + \frac{L^2 \gamma (1-\gamma)^2}{4H^2} [1-8(1-\gamma)+24(1-\gamma)^2] b_p \\ + \frac{L^2 \gamma}{2H^2} [12(1-\gamma)^2 - 1] h_{2q}, \quad b_p = b \sin(\varphi + \alpha_1), \quad h_{2q} = h \sin(2\varphi + \alpha_2)$$

が求まる。上式において、1次および2次の harmonics で表わされている擾動項を除くと、円対称の円盤恒星系の密度分布を示す式と一致し、特にそれが定常状態にあればその限界半径 R は $(1-2\gamma)=0$ より $R = \frac{L}{2H}$ で与えられる。

§7 磁界近似の段階では $H(t)$ の函数形は定まるから、2, 3の単純な函数形を仮定し、前節の結果について物理的の意味について簡単に觸れておこう。(15)と(16)において、

(i) $H = H_0 = \text{const.}$ の場合

$$b = b_0, \quad h = h_0; \quad \gamma_1 - \gamma_{10} = \gamma_2 - \gamma_{20} = -\omega_a t$$

$$(b_0, h_0, \gamma_{10}, \gamma_{20}, \omega_a \equiv \frac{1}{2H_0} : \text{const.})$$

(ii) $H = H_0(1 + \alpha e^{\lambda t}); \quad 0 < \alpha < 1, \lambda : \text{const.}$ の場合

$$b = b_0 \sqrt{1 + \alpha e^{\lambda t}}, \quad h = h_0 (1 + \alpha e^{\lambda t});$$

$$\gamma_1 - \gamma_{10} = \gamma_2 - \gamma_{20} = -\omega_a t + \frac{\omega_a}{\lambda} \log(1 + \alpha e^{\lambda t})$$

(iii) $H = H_0(1 + \alpha \sin \lambda t); \quad 0 < \alpha < 1, \lambda : \text{const.}$ の場合

$$b = b_0 \sqrt{1 + \alpha \sin \lambda t}, \quad h = h_0 (1 + \alpha \sin \lambda t);$$

$$\gamma_1 - \gamma_{10} = \gamma_2 - \gamma_{20} = -\frac{3\omega_a}{\lambda \sqrt{1 - \alpha^2}} \tan^{-1} \left(\frac{\tan(\frac{\lambda t}{2}) + \alpha}{\sqrt{1 - \alpha^2}} \right),$$

$$\text{特に, } 0 < \alpha \ll 1 \text{ なら } \gamma_1 - \gamma_{10} = \gamma_2 - \gamma_{20} \approx -\omega_a t + \frac{\alpha}{\lambda} \omega_a \cos \lambda t.$$

となる。Local centroid の中心の周の角速度 ω は $\omega = \frac{1}{r} \int \Phi F(r) dV$ で表わされるから、 Φ の平均値が Φ_0 とみれば ($\Phi_0 = \int \Phi F(r) dV$ とする方が $F(r)$ を定めることは可能), $\omega = \frac{\Phi_0}{r} \approx \frac{1}{2H} (1 - \gamma)$ と書ける。簡単のため、 $\varphi_0 = 0$ とすれば前節の(17)における $b\varphi$ および $h_2\varphi$ における $\sin \pi$ の arguments は、 ωt と上表の γ との和で表わされる。

したがって、 γ を一定にしたとき $\varphi =$ 一定の部分では、例えば上表の(i)の場合には、角速度が $b\varphi$ につき $\omega - \omega_a \approx -\frac{1}{2H_0} \gamma = -\frac{1}{2H_0} \frac{\gamma^2}{(1 + \gamma^2)}$

また $h_{2\varphi}$ につき $\omega - \frac{\omega_0}{2} = \frac{\lambda}{4H_0}(1-2Y) = \frac{\lambda(H+K^2)}{4H_0(H+K^2)}$ をもって進行する。可
 わら、 b_{φ} については中心 ($Y=0$) では $\omega - \omega_a = 0$, 限界半径 R の
 とらでは $\omega - \omega_a = -\frac{\omega_a}{4}$ となって leading arm ができ、 $h_{2\varphi}$ につ
 いては $Y=0$ では $\omega - \frac{\omega_a}{2} = \frac{\omega_a}{4}$ また $Y=R$ では $\omega - \frac{\omega_a}{2} = 0$ となって trailing
 arm ができる。 (iii) の場合には φ や角速度が週期 $\frac{2\pi}{\lambda}$ で擾動する
 が、平均的には (i) の場合と同じことになりえる。また (ii) の場合
 には、 $\lambda > 0$ なら角速度は時間とともに (i) の場合よりも増して
 いき、 $\lambda < 0$ なら減じていくことになる。

さて、 $t=0$ のとき擾動による密度変化 $\delta\rho$ の極大が棒状の腕
 となり、 $b_0 \neq 0$ なら $\varphi = 90^\circ - \delta_{10}$ の方向の半径に沿い、 また $b_{10} \neq 0$
 なら $\varphi = \frac{1}{2}(90^\circ - \delta_{20})$ 方向とその反方向に延びた直径に沿って現われ
 ることは前表のいづれの場合にも可能である。そして、二
 つ腕の pattern は時が経つにつれて恒星系の微分回転によつて
 曲げられていき、次第に巻き数の多い渦状の腕に変化してい
 く。その渦状が leading となるか trailing となるかは上述のよう
 に擾動の起り方によるが、2本の arms については多くの場
 合 trailing であろう。なお、前表(ii)の場合に $\lambda t_1 > 0$ が十分大き
 く $\log(1 + \alpha e^{\lambda t_1}) \approx \log \alpha + \lambda t_1$ とすれば $\delta_1 - \delta_{10} = \delta_2 - \delta_{20} = 0$ となるから、
 初期に渦状構造が作られていても、この時間 t_1 に至るまでに
 渦状構造は微分回転により崩壊されていくことである。

以上の二つとも円盤状恒星系の力学的モデルでは、Lindblad

のいふ如き速度が運動して、これをこの星の腕の回転より
 遅く渦状の腕ができることになる。直径に跨る腕の棒状の
 腕が中心と周縁との間で2本のとれどれの腕を1巻きするに
 要する時間は $\frac{2\pi}{\omega_a}$ である。この年数を銀河系の太陽付近にあり
 る観測値 ($\omega_0 \sim 250 \text{ pc}/10^6 \text{ yr}$, $r \sim 10^4 \text{ pc}$, $1 - \gamma = \frac{r}{R + r\gamma^2} \sim 0.4$) から計算
 すると、 $\omega_a \sim 0.06 \text{ } 10^6 \text{ yr}$ だから $4 \times 10^8 \text{ yr}$, をおち2回の銀河
 回転にあたる年数となる。これはB型からA型に移る段階に
 ある主系列星の life-time にあたる。よって、主系列星の晩期
 型星の空間分布に渦状構造が認められないのは、長い年数が
 経ち渦状の巻き数が多くなり渦状の腕の間隔が実際上をくま
 ったためと考えることが出来る。

